





「ねえ 櫻井君…… 私のおっぱいって……好き？」

「ん？ どうしたの急に」

「私…… 自分の胸あんまり好きじゃなくて……
もう少し小さい方がよかったのにつて……」

「なにを言っているのだ委員長ッ！」

「ふえええっ!? どうしたの急に大きな声出して?」

「う……うん 言ってる意味はよく分からなかったけど
櫻井君はおっぱい大きい方が好きなんだね……
よかった…… 大きなおっぱいのせいで嫌われたらどうしようかと……」
「んな訳ないじゃん…… 俺 委員長のおっぱい見た時
すぐ綺麗で感動したんだから……」

綺麗……

その言葉に胸がキュンとなる
好きな人に容姿を褒められるだけで
なんでこんなにも嬉しく感じてしまうのだろう

「もつと揉んでいい? 委員長の柔らかいおっぱい……」
「うん…… いいよ揉んで? 好きなだけ触っていいよ?」



「四つん這いになって委員長 また後ろから挿れたい……」
「うん…… ちよつと待って……」

私は床に両膝をつくと
言われた通り腰をグツと反らせてみた
自然とお尻が突き出され
膣穴はもちろんお尻の穴すらも
剥き出しになってしまう

「こ……これでいい？」
「いいよ委員長 すごくエロイ……」

すると櫻井君は
私のお尻の肉を両手で掴むと
グイッと左右に割り拡げた

「あっお尻拡げちゃダメ！ お尻の穴丸見えになっちゃう……」

「委員長の穴すごく可愛いよ」
「か可愛い穴とか言わないでよ……」
「そんな所褒められても反応に困るでしょ」

私が気恥ずかしさに照れていると
そんな事はお構いなしに
櫻井君が膣内へと入ってきた

お尻を思い切り突き出していたせいで
おちんちはすんなりと最奥へ到達した
そしてそのまま櫻井君は
私の膣内を愉しむようにゆっくりと腰を動かし始めた



膣内を行き来していたおちんちんが
次第に太く張り詰めてきた

「……出そう?」

「うん……いい?」

「このまま中でイッても……」

櫻井君が切なそうな声で囁きかけてくる
私の子宮に精子を送り込みたくて
仕方がないというそんな声だ

「……うん わかってる 一番奥で気持ち良くなってる?
ホントは駄目なんだよ? 今日だけ……
今日だけ特別なんだからね……?」

今日だけ特別……そう自分に言い訳をする
彼に強引に押し切られたのだと自分に嘘をつく

けど心の奥底では気付いていた
私自身が櫻井君の精液を欲しているという事に……

世界で一番大好きな人の精子を
一番大事なトコロで受け止めてあげたかった……
彼が私を妊娠させたがっているのと同じくらい
私も彼の子供を妊娠したがつっていた……



「じゃあこのまま中に出すね……
委員長の奥に思いつ切り……」

櫻井君は私の腰を強く掴むと
さらに激しく腰を叩き付けてきた

私の子宮に精液を注ぎ込む
ただそれだけの為に

身体を完全に固定されてしまった私は
子宮口をぽっかりと拡げたまま
その瞬間をただ待つことしかできなかった

「きちやう？ きちやうの？ いいよきて？ 精子……っ来てっ♡」
「ああ出る……っ精子出るっ！」

櫻井君が気持ちよさそうな声を上げ
おちんちんを一番奥まで押し込んできた
尖端が子宮口にめり込むほど
強く押し当てられると同時に
精液が勢いよく噴き出し始めた

「きた……あつたかいのがお腹の奥に……
赤ちゃん作る体液…… いっぱい広がってっ……」

どくどくと精液を注がれていく度に
私の全身を快感が駆け巡った



「床ひんやりして気持ちいい……」
「背中 大丈夫？ 委員長……痛くない？」
「うん大丈夫痛くない」

……やっぱり私こうやって向かい合っただけするのがいいな」

「委員長は正常位が好きなんだ」

「正常位が好きっていうかその……」

櫻井君の顔が見えてる方が安心できるの……」

いま私好きな人に抱かれてるんだなって実感できるから……」

そう私は今からもう一度彼に抱かれるのだ
目の前にいる大好きな人に……」

これから挿入されるのは彼のおちんちんで

これから注ぎ込まれるのは他の誰のものでもない

櫻井君の精子なのだ

私はこの上ない安心感に包まれたまま
再び彼を受け入れていった

この人だったら何をされてもいい

たとえその結果妊娠したとしても後悔はなかった



「ああイキそう……また中出ししていい？
精液出しちゃっていい？」
「え？ さっきも出したじゃない
なんで何回も訊くのお……？」

「委員長の口から聴きたいんだ
エロい口調で中出してくださいって……言ってくれる？」
「ええ……なんて言えばいいの？」
「そそるような生々しい表現で
耳元で囁くようにエロくお願い……」
「え……注文多いなあ……」

どんなテストよりも難しい問題を出されてしまった
とりあえずパツと浮かんだ
彼が喜びそうなフレーズを言ってみる

「あなたの元気に泳ぎ回ってる沢山の精子を……
私の腰の奥にある赤ちゃん育てる大事なお部屋に
びゅーっびゅーっ注いでください……っ」

言ってる途中から恥ずかしくなり
最後の方は投げやりになってしまった
しかし櫻井君にとってはこれで充分だったようだ
心底嬉しそうな顔を浮かべ元氣一杯に腰を加速させていった



「いくっ……精液でるっ」
「キス……キスしながら精子入れて♡」

櫻井君が私の唇に唇を重ねてくれると同時に
胎内でも子宮のオクチとおちんちんのオクチが
キスをするかのようにピタリと重なった

その瞬間とてつもない快感が
稲妻のように私の中心を貫いた

視界が真っ白に染まり
身体あらゆる部分が
意思とは無関係に痙攣する

そして気付いた時には
櫻井君の精子が膣奥に注ぎ込まれていた

これ以上ないくらいの至福の悦びと
気が遠くなる程の圧倒的な絶頂感が
私を包み込む

「おちんちん……
中ですごいびゅーびゅー出してる……
まだこんなに出るんだ……
男の子って不思議……」

胎内にじわりと広がっていく温もり
櫻井君の絶頂の証……
私はそれを子宮という器で
一滴残らず受け止めていった



「委員長 口で綺麗にしてくれる?」
「え? そのべとべとのをお?.....?」

「お願い」
「んーもう.....っ 仕方ないなあ」

私は渋々了承すると
互いの体液にまみれたおちんちんを
咥内へと迎え入れていった

表面に舌を這わせ
付着した愛液を丁寧に舐め取っていく
尿道を舌先で根元からなぞり上げ
染み出た精液の残滓を吸い上げる

さつき飲まされた時に初めて味わった
お世辞にも美味しいとは言えない
あの生臭い精液の味.....

なのに どうしてだろう?
自分の体液の中から微かにするその味は
何故だか悪くないような気がした
私はその隠し味を密かに愉しみながら
纏わりついている愛液のぬめりを
舌先で丹念に拭い取っていた



「どう？これで綺麗になったと思うけど……」

精液の味がしなくなるまでしっかりと綺麗にして
仕上げに力一杯吸い上げ「お掃除」を完了させた
しかし咥内から解放されたソレを見て
私は仰天してしまった

「さっきよりもまた大きくなってるんですけど……」
「ごめん委員長……その〜」

「はいはい分かったわよ、また精子出したいんでしょう？
じゃあ最後にサービスしてあげる」

私は口を目いっぱい広げ
再びおちんちんを喉奥まで咥え込んだ
舌と唇を密着させて激しく摩擦し
尿管の中のすべてを搾り取るかの勢いで
強く強く吸い上げていく

射精の予兆が現れるまでさして時間は掛からなかった
新たに溜め込まれた精液によって尿道が膨れ上がり
分泌される粘液に精子の味が混じり始める

「すごい……おちんちんの先っぽ
はち切れそうなくらいパンパンに膨れてる……」

「これもう射精寸前なんだよね……
やっぱりまた飲まなきゃ……駄目？」

恐る恐る訊いてみると
それに対する櫻井君の返答は驚くべきものだった



「んも……教室の中自ら性器を拡げて
男子の射精を待ってるって……
いったいどんな状況なのよっ」

櫻井君が私に要求したのは私にエッチなポーズをとらせ
それを見ながら自慰行為をしたいというものだった
そして最後は中出しをしたいのだと
一体どうしたらそんなエッチな発想ができるのだろう
こういう事に関しては本当に天才的なんだから……

「うわー すごいエロいよ委員長
これ以上エロい光景なんて絶対はないよ……」

おちんちんを自らの右手で激しく擦りながら
櫻井君が私の全身に視線を走らせる
舐め回すようにとはまさにこういう事を言うのだろう
けれどそこに嫌な感じは全くしなかった

「男の子の自慰ってそういう風にするんだ……
そんなに激しくおちんちんしごいて……
痛くないの？」

「気持ち良いよ……
委員長の膣には
全然敵わないけど」

きつと私の膣内の感触を思い浮かべているのだろう
櫻井君は見たことのないような真剣な眼差しで
一心不乱に右手を動かし続けていた
勉強にもこれと同じぐらい取り組んでくれたらいいのに……



「射精しよう？ いいよ入れて……」

挿入しやすいよう指で割れ目を拡げてあげると
櫻井君は待ち切れないとばかりにおちんちんを潜り込ませてきた

「あ………出た………」

先端が膣内へ呑み込まれると同時に
堰を切ったように射精が始まった

「いま精子かけられてるの分かる…… おちんちん凄い脈打ってる」

快楽を伴わない状態での中出しだったので
膣内でのおちんちんの様子が驚くほどハッキリと感じ取れた

「これ今……赤ちゃん作ってるんだよね……」

私の卵子に精子かけて…… 私の中で射精するの気持ちいい？」

「うん 気持ち良い…… 精液止まらない……」

「いいよ…… 最後の一滴まで膣で出し切って……」

必死に奥で射精を続ける櫻井君の姿から
私を妊娠させたいという
熱い想いがヒシヒシと伝わってきた

私もそれに応えたい一心で
彼の精子を一滴残らず呑み込んでいった……



「精子全部出た？ 満足？」
「うん 出た…… 委員長の中に全部出たよ……
嬉しかった…… ありがとう委員長」

射精を終えた櫻井君が幸せそうにお礼を言ってくれた
その顔が見れただけで
膣内で射精させてあげて良かったと思えるほどだった

私の身体——私の肉体で
好きな人を欲ばせてあげられるなんて女としてこれ以上の幸せはなかった
もし私が本当に妊娠したなら 櫻井君はもつと喜んでくれるだろうか？

「よかった……
ねえ…… 最後にもう一回キスして？」

今日何度目のキスだろう？！

この日最後に交わしたキスは
身も心も蕩けるような
とても甘く優しい優しいキスだった

私はこの唇と子宮から感じるぬくもりに包まれながら
永遠に続いてほしいと思える幸福の海へ溶けるように沈んでいった……



「はあ、疲れた」
「そんじゃ帰るか 家まで送ってくよ」

教室の清掃を終えて廊下に出ると
櫻井君が気を使って言ってくれた

「そんないいわよ」

「送らせてよ 委員長に何かあったら心配じゃん」

「あ…… ありがとう」

そのさりげない優しさが嬉しかった
学校から一緒に帰るなんてなんだか恋人同士みたい
そんな事を考えているとふと大事な事に気付いてしまった

そういえば私たちはちゃんと恋人関係になれたのだろうか？

お互い好きな気持ちを伝え合っただけ

肝心の事を訊きそびれているような気がした

こうして身体を重ねたことで

既成事実としてもうそういう関係だと言えなくもなかったが

櫻井君にはちゃんと言葉にして欲しい気持ちが少なからずあった



「委員長 俺たちの事だけど……
このままウヤムヤなまま別れるのアレだからさ
キチンとしとこうと思つて」

「あ……うん」

私の考えている事を察してくれたのか
それとも彼自身も気になっていてくれたのか
櫻井君の方から話を切り出してくれた

櫻井君が真剣な顔をして私の前に立つ

私が胸をドキドキさせて次の言葉を待っていると
彼の口からはいかにも櫻井君らしい告白が飛び出した

「結婚を前提にこれから中出しさせてください」
「な……」

「何そのプロポーズの言葉〜!!」

つい廊下中に響き渡るような大声でツツコミを入れてしまった

「いや心の底から偽りなく
飾らない素直な気持ちのつもりだったんだけど……ダメ？」

「却下……ホント櫻井君ってバカだよなー」

もう本当に櫻井君はバカなんだから……
正直呆れてものが言えなかったけれど
彼に対する想いに揺るぎはないのだから恋とは不思議なものだ
それに彼の口から出た
結婚の二文字に心がときめいてしまったのも事実だった





「はい……」



私の答えは決まっていた
私は差し出された手をそつと握り返すところ言つた



「ゴメンわかつた 言い直すわ」

櫻井君は改めて姿勢を正すと
私の前に右手を差し出し 優しい声でこう言ってくれた

「俺と付き合つてくださーい」



——どうしてこうなってしまったのだろうか？

大好きな人の温もりを掌で感じながら

今日何度目かの疑問に思いを馳せる

けれどそれはもう悔やむような後ろ向きの感情ではなかった

私の心を覆っていた虚栄心と言う名のちっぽけな鎧は

櫻井君がいとも簡単に剥がしてくれた

ずっと心の奥底に隠してきた本当の自分を

彼は受け止め愛してくれた



櫻井君と一緒になら変われそうな気がした

彼が私の歩幅に合わせて歩いてくれる

これからずっと一緒に歩いていきたい……

はじめての恋人が最後の恋人であって欲しいと
心の底から願った夜だった……

